

一宮市

いわとまつり
石刀祭

歴史

石刀祭は江戸時代には8月19日に祭礼が行われていたことが、宝暦5年（1755）の「尾陽村々祭礼集」などの文献で明らかです。戦前、山車は5輛ありましたが、第二次世界大戦で更屋敷・呑光寺の山車が焼失しました。本来、犬山に次ぐ規模の山車まつりであったと言えます。現存する3輛の山車はいずれも三層式の犬山型の山車で、昭和52年（1977）に市の有形民俗文化財に指定されました。また、祭は令和元年（2019）に県の無形民俗文化財に指定されています。

祭礼日

4月19日以降の日曜日

祭礼場所

石刀神社

内容・見どころ

現在では4月19日に頭人行事を含む例祭を、その後の日曜日に山車奉納・献馬を行っています。山車奉納の祭礼が盛んな愛知県内にあって、山車と頭人行事が複合する唯一の祭礼です。祭礼の中心となるのは山車奉納と献馬で、大聖車・中屋敷車・山之小路車の3輛がからくり人形を奉納し、大聖・更屋敷・呑光寺・山之小路・六地藏・吉田の六瀬古が馬を奉納（オマント）します。神社境内で行われる車切りも見どころの一つです。



一宮市

くろいわぎおんまつり
黒岩祇園祭

歴史

伝承によると、祭は宝暦治水の犠牲者の霊を慰めるために始まったとも言われ、流域の他村が船上で行う祭礼であるのに対し、黒岩は川岸に船を繋留する土地を持たなかったためオカマツリとなったとも言われています。19世紀前半の「懷中硯 葉栗一覽草」には「大川にて船祭り」という記述があり、川船で行われていた様子の一端をうかがい知ることができます。木曾川沿いに広がった天王信仰の水神の要素を色濃く残す重要な祭です。平成28年（2016）に、祭が市の無形民俗文化財に指定されました。

祭礼日

8月第1土曜日

祭礼場所

黒岩石刀神社

内容・見どころ

現在は山車がお囃子とともに黒岩公民館から黒岩石刀神社の間を曳き廻し往復します。伝統的に提灯に立てる蠟燭は和蠟燭を使用し、ムギワラで作った「オクリブネ」に提灯を付け、南派川まで持って行って流し祭は終わります。山車は1輛で、2層造り、屋根が唐破風の吹抜き、その上に提灯を付けるハチノスがあり、高さは15m、車輪は一本四輪の外輪で、舳先のように赤白の提灯を付けて船の形に見せています。山車の提灯が夜空を照らします。



白台祭

【瀬部 白台祭】



祭礼日

8月第3土曜日

祭礼場所

八劔社・観音寺

歴

史

古くは隣接する観音寺の行事として観音様の命日の旧暦7月10日に行われていました。奈良時代に近江国の竹生島から、嵐の晩に観音寺の境内にあった銀杏の木に観音様の仏頭が飛来し、それを清浄な挽き臼の上に安置し祀ったことが祭の由来と言われています。臼台祭は、尾張津島天王祭に代表される巻藁提灯飾りの部分が伝わったものですが、この地域で独自に発達した風流であると考えられます。平成22年（2010）に、祭が市の無形民俗文化財に指定されました。

内容・見どころ

臼台祭は、尾張津島天王祭に代表される巻藁提灯飾りの部分が伝わったものですが、臼を回すように提灯を回転させるのは本場である尾張津島天王祭でも見られないものです。笛や太鼓のお囃子に合わせて、1年の月数と日数を表す大小の提灯を取り付けた挽き臼様のドラム（古くは巻藁にかぶせた竹籠）を挽き臼さながらにくるくる回すと、美しい光の帯が夜空に浮かび上がります。



一宮市

桃花祭

【馬まつり】



祭礼日

4月1日～3日

祭礼場所

真清田神社

歴

史

真清田神社の例大祭で、神様の御鎮座を祝い、桃の節句にちなんだ厄払いの祭でもあります。以前は桃の節句に行われていました。神社周りは桃の木が群生し、「青桃丘」と呼ばれていました。霊力があると信じられているこの桃の枝をもって身の穢れを祓い、当時神社の近くを流れていた木曾川にこの枝を流して除災招福を祈ったのが祭の始まりとされています。

内容・見どころ

別名「馬まつり」とも称され、4月3日の神輿の巡幸には、馬上に御幣や人形を乗せた「馬の塔」と呼ばれる飾り馬が練り出し、稚児行列、一宮市消防音楽隊、民謡会のパレードなども加わります。また、同日に神社境内で流鏝馬神事が行われ、1日には短冊祭、2日には歩射神事や試楽祭が行われます。門前・東西には祭車（山車）が飾られ、祭の雰囲気を盛り上げます。



瀬戸市

しなのぎおんまつり

品野祇園祭



歴史

品野町4丁目津島神社の祭礼で、牛頭天王信仰に基づく祭礼は江戸時代以前から行われていたようですが、地域では令和2年（2020）に150回目を迎えたとされています。当初は3輦の山車がありましたが、現在は南島の山車1輦のみが祭礼に用いられます。山車に祀られる像は、平成25年（2013）に「品野祇園祭の神武天皇像および従者像」として市の有形民俗文化財に指定されています。

祭礼日

7月第3土曜日（旧暦6月16日）

祭礼場所

津島神社周辺（下品野中心部）

内容・見どころ

1輦の山車を中心に、神輿や踊りの隊列が地区の中心部を巡行する、厄病除け、夏病み除け、豊作・商売繁盛を祈願する祭礼です。御神体は事前に全宝寺から山車上に遷され、祭礼当日の午後6時から4時間国道248号線を通行止めにして品野坂上から大蔵橋まで巡行します。道中には子供たちの描いた行灯が設置され、吹奏楽や和太鼓の演奏などをイベント会場で行い、地域の夏祭りとしてにぎわいます。



春日井市

ぎおんさい・つしましやまつり

祇園祭・津島社祭
【祇園祭】

歴史

山車による祭礼は、地区の災厄を払うために行われるようになったと伝えられています。平成13年（2001）に、山車とからくりが市の有形民俗文化財に指定されました。

祭礼日

7月第3土曜日

祭礼場所

五社神社・津島神社

内容・見どころ

山車は1輦あり、山車の曳き廻しやからくり人形、神楽、お囃子などが披露されます。からくり人形は、山車の2階部分に「唐子」、3階部分に「恵比寿」「大黒天と瓶」を搭載しています。恵比寿と大黒天が釣りに出かけるというストーリーで、笛や太鼓の演奏に合わせて演技します。



秋の大祭
【秋祭り】

内々神社は、平安時代に編纂された「延喜式神名帳」に記載されている歴史深い神社です。山車は、上で舞を奉納するので「御舞台」と名付けられています。祭礼はかつて旧暦8月15日に行われ、江戸時代の記録にも祭礼の様子が記されていますが、現在は山車の巡行は行われていません。昭和58年（1983）に、山車が市の有形民俗文化財に指定されました。

祭礼日

10月15日直前の日曜日

祭礼場所

内々神社

内容・見どころ

現在は山車の巡行は行われていませんが、秋の大祭の約1週間前に山車倉から出され、「御舞台」が神社境内で披露されます。御舞台の上でお囃子に合わせて稚児や獅子が舞い、町中を練り歩き壮麗豪華な祭礼絵巻が繰り広げられます。



犬山祭



犬山祭は当地の産土神を祀る針綱神社の祭礼であり、寛永12年（1635）、尾張徳川家附家老である犬山城主成瀬隼人正正虎公の奨励で始まって以来、今日まで継承されています。平成18年（2006）に「犬山祭の車山行事」として国の重要無形民俗文化財に指定され、平成28年には「山・鉦・屋台行事」の一つとしてユネスコ無形文化遺産に登録されました。また、山車13輦も昭和39年（1964）に県の有形民俗文化財に指定されています。

祭礼日

4月第1土曜日・日曜日

祭礼場所

針綱神社

内容・見どころ

山車は「車山」と表記され、曳き廻される13輦の車山は夜になると提灯に灯りが灯されます。曳き廻しは豪快で、180度方向転換する「どんでん」や、辻を曲がる際に90度方向転換する「車切」が行われます。三層構造の車山の最上層では、江戸時代から伝わるからくり人形が操られ、様々な演技が奉納されます。13輦の車山全てに、演目が異なる精巧なからくり人形が備えられていることは、犬山祭の大きな特色の一つです。



犬山市

おおあがたじんじゃれいさい

大縣神社例祭



歴史

山車は稚児山といい、文化13年（1816）に建造されたものです。例祭は、かつては旧暦8月1日に行われていましたが、明治40年（1907）より10月11日になり、現在は10月10日に行われています。江戸時代には稚児山に人形を飾り、芝居などを行っていたようです。

祭礼日

10月10日
（稚児山を曳くのは別日）

祭礼場所

大縣神社

内容・見どころ

山車は稚児山が1輛あり、曳き廻しや2階部分へ乗り込んだ役者（稚児、獅子、鼓、小太鼓、大太鼓等）によるお囃子の演奏などが行われます。例祭は10月10日ですが、稚児山を曳くのは10月10日前後の土曜日・日曜日となる場合があります。試楽祭と本楽祭があり、本楽祭では、おまん（割竹に花型の色紙を貼ったもの）で稚児山を飾ります。



小牧市

あきばまつり

秋葉祭



歴史

小牧宿を火災から守ることを祈願した祭だと考えられ、山車は天明年間に成田屋又七が発起して1輛を奉献したのが始まりと伝えられています。祭はかつて旧暦の7月26日から28日に行われ、秋葉社大祭当日は4輛の山車が、神事の後からくりを披露しました。伊勢湾台風により郷倉が壊れたこともあり、祭は一時中断しましたが、昭和52年（1977）以後、現在の日程で開催されることになりました。昭和57年に、山車4輛が市の有形民俗文化財に指定されました。

祭礼日

8月20日前後の土曜日・日曜日

祭礼場所

小牧神明社

内容・見どころ

宵祭は土曜日に行われ、山車には140個ほどの提灯が吊り下げられます。午後6時頃、各町内を出発し山車はお囃子の音とともに練り歩き、宿の中心部で「どんてん」が行われ宵祭が終わります。日曜日の本祭では、山車は本祭の仕様に変わります。午前10時に各町内を出発し、神明社境内の秋葉社前に山車が集結すると午後2時から神事が始まり、その間からくりが奉納されます。神事後、中本町から順に「どんてん」が行われ、祭は終わります。





神明社の本祭礼で、徳川義直が小牧山へ来遊した折、牡丹の造花を子供に持たせ歌舞謡踊させたことに始まるとの伝承があります。寛文7年（1667）には上之町と下本町で2輦の山車が曳かれ、山車舞台では子供芝居が演じられました。山車は昭和50年代に1輦になり、舞台では江戸時代には少年による狂言が、明治時代には児童による演技が、その後子供歌舞伎や日本舞踊が披露され現在に至ります。昭和60年（1985）に、山車が市の有形民俗文化財に指定されました。

祭礼当日、山車の飾り付けが行われ、午後2時から神事が行われます。山車舞台での舞踊は神事の途中から始まり、舞踊終了後、山車を格納して祭礼は終了します。山車に設置した舞台では少女による日本舞踊が披露され、祭礼の見どころとなっています。



元は津島神社と同じ川祭で五条川に山船を浮かべていましたが、寛文9年（1669）に川の流路が変えられたため、山車に改修されたと言われています。寛文年間に飢饉が起きたとき、村の名主の夢枕に現れた須佐之男命のお告げに従ったところ飢饉が収まったため神様に感謝する祭が始まったとも言われ、このとき奉納した団子を「こがし」と言ったことが祭の名の由来と言われています。昭和50年（1975）に、山車2輦が市の有形民俗文化財に指定されました。

祭の前々日から準備が始まり、亀翁寺で山車に付ける切り花を作ります。祭の当日に切り花等の飾りが付けられます。山車の上に日下部太鼓の囃子手が乗り、美濃路で2輦の山車が曳かれます。笛・太鼓のお囃子、提灯の灯とともに幻想的な光景となります。山車に付けられた切り花は、厄除けや雷除けになると信じられており、祭の最後に山車の上から投げ落とされ、翌年の祭まで玄関脇に飾ります。



岩倉市

てんのうさい
天王祭

祭礼日

8月第4日曜日の前日土曜日

祭礼場所

新溝神社

歴史

岩倉市の山車まつりは江戸時代前期から始まったと言われています。大上市場（本町、新溝神社）、中本町（神明大一社）、下本町（神明生田神社）に山車が1輛ずつあり、本来は3輛とも神明大一社の祇園祭の山車でした。明治時代に山車のある地区それぞれの神社の祭礼となり、その後、昭和30年（1955）頃に山車曳きが途絶えましたが、平成3年（1991）に復活しました。大上市場の山車は、昭和49年に市の有形民俗文化財に指定されています。

内容・見どころ

山車曳き（宵まつり）が行われます。きれいな提灯に彩られた山車は、夕方に神社の参道を巡行します。そこで、からくり人形やお囃子を披露します。大上市場の山車には、からくり人形「肩上倒立」「乱杭渡り」「ザイフリ」が搭載されています。また、山車は約8mもの高さがあり、尾張でも最大級です。



岩倉市

ぎおんさい
祇園祭

祭礼日

8月第1日曜日の前日土曜日

祭礼場所

神明大一社

歴史

岩倉市の山車まつりは江戸時代前期から始まったと言われています。大上市場（本町、新溝神社）、中本町（神明大一社）、下本町（神明生田神社）に山車が1輛ずつあり、本来は3輛とも神明大一社の祇園祭の山車でした。明治時代に山車のある地区それぞれの神社の祭礼となり、その後、昭和30年（1955）頃に山車曳きが途絶えましたが、平成3年（1991）に復活しました。中本町の山車は、昭和50年に市の有形民俗文化財に指定されています。

内容・見どころ

山車曳き（宵まつり）が行われます。きれいな提灯に彩られた各地区の山車は、夕方にそれぞれの神社を出発し、旧岩倉街道を巡行して「くすのきの家」に集まります。そこで、からくり人形やお囃子を披露します。中本町の山車には、からくり人形「那須与一」「チリリ」「ザイフリ」が搭載されています。また、山車は約8mもの高さがあり、尾張でも最大級です。



ぎおんさい
祇園祭



岩倉市の山車まつりは江戸時代前期から始まったと言われています。大上市場（本町、新溝神社）、中本町（神明大一社）、下本町（神明生田神社）に山車が1輛ずつあり、本来は3輛とも神明大一社の祇園祭の山車でした。明治時代に山車のある地区それぞれの神社の祭礼となり、その後、昭和30年（1955）頃に山車曳きが途絶えましたが、平成3年（1991）に復活しました。下本町の山車は、昭和49年に市の有形民俗文化財に指定されています。

祭礼日

8月第1日曜日の前日土曜日

祭礼場所

神明生田神社

内容・見どころ

山車曳き（宵まつり）が行われます。きれいな提灯に彩られた各地区の山車は、夕方にそれぞれの神社を出発し、旧岩倉街道を巡行して「くすのきの家」に集まります。そこで、からくり人形やお囃子を披露します。下本町の山車には、からくり人形「菅丞相」「唐子遊」「ザイフリ」が搭載されています。また、山車は約8mもの高さがあり、尾張でも最大級です。



いわふじてんのうまつり
岩藤天王祭



神明社の祭礼で、祭に登場する山車は、岩藤公会堂の解体の際に見つかった山車の棟木に明治24年（1891）の墨書があり、この時期に製作されたことがわかっています。祭は昭和12年（1937）を最後に中止されましたが、その後、昭和56年に町の有志らによって復活しました。日進市唯一の山車は、「チョウチングルマ」という名称で、平成21年（2009）に市の有形民俗文化財に指定されました。

祭礼日

7月下旬の日曜日

祭礼場所

神明社

内容・見どころ

山車は1輛あり、神事後、善光寺堂前から神明社境内の天王社までお囃子を演奏しながら山車が曳かれます。祭囃子は三河から伝来したとの言い伝えがあります。祭当日の夜、提灯が灯され、山車を何度も回転させる山車の曳き廻しが行われます。祭の見どころです。



清須市

おわりにしびわじまつり

尾張西枇杷島まつり



歴史

享和2年（1802）に天王祭で奉納山車を製作したのが始まりと言われています。王義之車、頼朝車、紅塵車が享和2年に、泰亨車が文化2年（1805）に製作されました。その後、尾張藩より文化5年に山車を曳くことが許され、文化9年に人形を山車に乗せることが許されました。明治4年（1871）に頼光車が製作され、現在のように5輛の山車が曳かれるようになりました。5輛の山車は、昭和60年（1985）に市の有形民俗文化財に指定されています。

祭礼日

6月第1土曜日・日曜日

祭礼場所

橋詰神社・六軒神社・二ツ杵神明社等

内容・見どころ

美濃路沿道での山車の曳き廻しやお囃子、からくり人形の演技などが行われます。見どころは、お囃子と一体となったからくり人形の演技や、山車が方向転換する「曲場」などの勇壮な曳き廻しです。山車は5輛あり、それぞれにからくり人形が乗せられています。



清須市

てんのうまつり

天王まつり

【田のくれ祭、朝日の夏祭り】



歴史

子供の悪疫退散を願い、火車に提灯を付け祭ったことに始まります。山車は宝暦12年（1762）に造られたもので、昭和60年（1985）に市の有形民俗文化財に指定されました。

祭礼日

8月第1日曜日

祭礼場所

朝日天王社

内容・見どころ

山車は1輛あり、幕・飾り花・提灯を装着し、神主の祝詞後、御幣振り（小学生）、囃子方（中学生）を乗せ、梶方（村人）で天王社から愛宕社まで曳き、日が暮れて再び天王社へと曳かれました。現在は、山車の車輪や各部の老朽化により、飾り付けと提灯点灯のみを行い、曳くことはなくなりました。



前熊のお天王祭り



多度神社に津島神社が祀られていることから、津島神社の祭礼である「天王祭」が行われるようになりました。江戸時代末期に悪疫・凶作が続いた折、山車と山神楽を奉納し、無病息災・五穀豊穡を祈願したという口伝があります。青年会が中心となって行っていましたが、昭和32年（1957）頃に解散してからは前熊区の管理となりました。昭和58年に、山車が市の有形民俗文化財に指定されました。

祭礼日

7月16日以前で直近の日曜日

祭礼場所

多度神社

内容・見どころ

日が沈む頃、津島神社の灯明を上げ、祭が始まります。山車の提灯に火が灯り、山太鼓が奉納され、打ち囃し太鼓も山車のある多度神社に向かいます。大太鼓や小ばちを竹竿で吊り演奏しながら歩く道中には、地元の子供たちなどが描いた角行灯が参道まで並びます。山車は1輛あり、社殿前から参道へ曳き出し、戻ります。



津島秋まつり



大正15年（1926）に津島神社が県社から国幣小社に昇格したのを奉祝して、昭和2年（1927）10月1日に山車の祭と石採祭車の祭が合同で記念祭を挙げたのが始まりです。山車の祭はもともと、4地区で異なる日に行われていた祭礼で、起源は正徳元年（1711）に始まった七切祭です。石採祭車の祭は大正4年頃が起源と言われています。昭和43年に、山車16輛、石採祭車4輛、神楽21基が市の無形民俗文化財に指定されました。

祭礼日

10月第1日曜日と前日土曜日

祭礼場所

津島神社・市神社・大土社・居森社・穂歳神社・憶感神社・神守一里塚・秋葉神社・唐臼神社等

内容・見どころ

山車16輛にはからくり人形が搭載されており、迫真の演技を見せてくれます。また、前輪を浮かせ山車を回す「車切」を行います。石採祭車は、前一輪、後ろ二輪で、威勢よく鉦や太鼓を打ち鳴らしながら練り歩きます。そのほかに、鉦打ち太鼓と締太鼓が積まれた神楽（神楽屋形）の巡行も行われ、甲高い音色が演奏されます。



愛西市
津島市

おわりつしまてんのうまつり

尾張津島天王祭



歴史

津島神社の祭礼として600年近く続き、永禄元年（1558）に織田信長が現在の御旅所付近で朝祭を見学したという記録が残っています。昭和55年（1980）に「尾張津島天王祭の車楽舟行事」として国の重要無形民俗文化財に指定され、平成28年（2016）には「山・鉦・屋台行事」の一つとしてユネスコ無形文化遺産に登録されました。また、津島市と愛西市の山車（巻藁舟・車楽舟）6艘が、昭和59年に県の有形民俗文化財に指定されています。

祭礼日

7月第4土曜日と翌日日曜日

祭礼場所

津島神社・天王川公園

内容・見どころ

土曜日は宵祭で、約400個の提灯を半円山型に飾り、中央高く立てた真柱には12個の提灯を掲げた津島の巻藁舟5艘（下車・堤下車・米車・今車・筏場車）が川面に浮かびます。日曜日の朝祭では、愛西の市江車を先頭に、装いを新たにし能人形が飾り付けられた絢爛豪華な車楽舟6艘が天王川を上ります。途中、市江車から10人の若者が鉦を持って川に飛び込み神社に向かいます。また、車楽舟からは児も上陸し、神社で神前奏楽が行われます。



弥富市

やとみじんじゃたいさい

弥富神社大祭
【秋祭り】

歴史

弥富市は、江戸時代以降の開発によってできた新田地域であるため、地区ごとに神社が勧請され、時期は不明ですが、それぞれに豊作を祝う秋祭りを行うようになりました。弥富神社は明治40年（1907）頃に周辺の氏神を合祀した神社で、以来10地区合同で祭礼を行っています。弥富市で石取車を祭に取り入れるようになったのは明治時代中期以降であり、神楽屋形のない地区がその代用として取り入れたようです。

祭礼日

10月第2日曜日

祭礼場所

弥富神社

内容・見どころ

午前中に、太鼓を打ち鳴らしながら各地区を練り歩いた後、午後から山車4輛、神楽屋形5基を含む10地区が整列して神社に入ります。石取太鼓や神楽太鼓を叩きながらのにぎやかな入場や、獅子舞、剣舞などの各種芸能の神前奉納が見どころです。山車は、石取車と呼ばれる祭車が4輛あり、そのうち3輛は、前一輪、後ろ二輪の御所車風の三輪からなる石取車ですが、1輛は屋根の付いた屋台車です。



楽平神社大祭 【秋祭り】



楽平は、中世末期に新田開発された草平新田と、極楽寺新田が明治8年（1875）に合併してできた新田で、時期は不明ですが、地区の神社で豊作を祝う秋祭りをを行うようになりました。弥富市で石取車を祭りに取り入れるようになったのは明治時代中期以降ですが、楽平の石取車の歴史は不明で、神楽屋形の代用として取り入れたようです。

祭礼日

10月第2日曜日

祭礼場所

楽平神社

神事後、地区名を金糸で刺繍した梵天と呼ばれる猩々旗を先頭に、石取車の行列が神社を出発して、地区内を鉦と太鼓を打ち鳴らしながら半日ほどかけて練り歩きます。石取太鼓を叩きながらの練り歩きが見どころで、にぎやかな祭です。山車は祭車1輦で、石取車風の山車です。



前ヶ平神明社大祭 【秋祭り】



前ヶ平は、江戸時代前期の開発によってできた新田で、時期は不明ですが、地区の神社で豊作を祝う秋祭りをを行うようになりました。前ヶ平地区で石取車を祭りに取り入れた時期も不明ですが、神楽屋形の代用として取り入れたようです。当初は石取車風に鉄骨で組み立てられていましたが、平成13年（2001）に桑名市で新造しました。

祭礼日

10月第2日曜日

祭礼場所

前ヶ平神明社

神事後、地区名を金糸で刺繍した梵天と呼ばれる猩々旗を先頭に、石取車の行列が神社を出発して、地区内を鉦と太鼓を打ち鳴らしながら半日ほどかけて練り歩きます。石取太鼓を叩きながらの練り歩きが見どころで、にぎやかな祭です。山車は祭車1輦で、前一輪、後ろ二輪の御所車風の三輪からなる石取車です。



弥富市

あきばしゃたいさい

秋葉社大祭
【秋祭り】

歴史

東中地、西中地地区は、江戸時代前期の開発によってできた新田です。秋葉社は両地区の氏神で、合同で祭礼を行っています。石取車は、神楽屋形のない両地区がその代用として取り入れたようです。西中地地区の石取車は昭和56年（1981）に桑名市八重垣町から買い受けたものです。

祭礼日

10月第2日曜日

祭礼場所

秋葉社

内容・見どころ

神事後、地区名を金糸で刺繍した梵天と呼ばれる猩々旗を先頭に、石取車の行列が神社を出発して、地区内を鉦と太鼓を打ち鳴らしながら半日ほどかけて練り歩きます。石取太鼓を叩きながらの練り歩きが見どころで、にぎやかな祭です。山車は祭車2輦で、前一輪、後ろ二輪の御所車風の三輪からなる石取車です。



弥富市

ごみょうしんめいしゃたいさい

五明神明社大祭
【秋祭り】

歴史

五明は、江戸時代に木曾川の中州を開拓した輪中村です。古くから神社が勧請され、時期は不明ですが、豊作を祝う秋祭りを行うようになりました。五明地区で石取車を祭に取り入れたのは明治時代中期以降であり、神楽屋形の代用として取り入れたようです。五明の石取車は、かつて桑名の石取祭で使われた祭車で、古い石取車の面影を残しています。

祭礼日

10月第2日曜日

祭礼場所

五明神明社

内容・見どころ

神事後、地区名を金糸で刺繍した梵天と呼ばれる猩々旗を先頭に、石取車の行列が神社を出発して、地区内を鉦と太鼓を打ち鳴らしながら半日ほどかけて練り歩きます。石取太鼓を叩きながらの練り歩きが見どころで、にぎやかな祭です。山車は祭車1輦で、前一輪、後ろ二輪の御所車風の三輪からなる石取車です。



素盞之男社大祭 【前ヶ須豊年祭】



前ヶ須は、江戸時代前期の開発によってできた新田で、古くから神社が勧請され、時期は不明ですが豊作を祝う秋祭りをを行うようになりました。前ヶ須地区で祭に石取車を取り入れたのは明治42年（1909）と伝えられています。当初の祭車は、桑名から買い受けた天保年間の古い様式を残したものでしたが、平成に入り新調され、現代的な祭車となりました。

祭礼日

10月第2日曜日

祭礼場所

素盞之男社

神事後、石取車の行列が神社を出発して、地区内を鉦と太鼓を打ち鳴らしながら1日かけて練り歩きます。石取太鼓を叩きながらの練り歩きが見どころで、にぎやかな祭です。山車は祭車1輦で、前一輪、後ろ二輪の御所車風の三輪からなる石取車です。



津島社大祭 【秋祭り】



中山は、江戸時代中期の開発によってできた小さな新田です。神社の勧請年代や、秋祭りの歴史については不明です。中山地区の石取車の由来や、祭に取り入れるようになった時期も不明ですが、神楽屋形の代用として取り入れたようです。

祭礼日

10月第1日曜日

祭礼場所

中山津島社

神事後、石取車の行列が神社を出発して、地区内を鉦と太鼓を打ち鳴らしながら半日ほどかけて練り歩きます。石取太鼓を叩きながらの練り歩きが見どころで、にぎやかな祭です。山車は祭車1輦で、前一輪、後ろ二輪の御所車風の三輪からなる石取車です。



弥富市

かわらがけしゃたいさい

川原欠社大祭
【秋祭り】

歴史

川原欠は、江戸時代前期に開発された小さな新田で、神社の勧請年代や、秋祭りの歴史は不明です。川原欠地区の石取車の由来や、祭りに取り入れた時期も不明ですが、神楽屋形の代用として取り入れたようです。現在、山車の巡行は行っていません。

祭礼日

10月第1日曜日

祭礼場所

川原欠社

内容・見どころ

山車が巡行していた頃は、神事後、石取車の行列が神社を出発して、地区内を鉦と太鼓を打ち鳴らしながら半日ほどかけて練り歩いていました。石取太鼓を叩きながらの練り歩きが見どころでした。山車は祭車1輦で、前一輪、後ろ二輪の御所車風の三輪からなる石取車です。



弥富市

おおたにしんめいしゃたいさい

大谷神明社大祭
【秋祭り】

歴史

大谷は、明治13年（1880）に開拓された新しい新田で、開発後に神明社が勧請されました。大谷地区で石取車を祭りに取り入れたのは伊勢湾台風以前ですが、伊勢湾台風で山車が流されたため、昭和48年（1973）に北部の中六地区から石取車を譲り受け、祭を復活させました。

祭礼日

10月第1日曜日

祭礼場所

大谷神明社

内容・見どころ

神事後、地区名を金糸で刺繍した梵天と呼ばれる猩々旗を先頭に、石取車の行列が神社を出発して、地区内を鉦と太鼓を打ち鳴らしながら半日ほどかけて練り歩きます。石取太鼓を叩きながらの練り歩きが見どころです。山車は祭車1輦で、前一輪、後ろ二輪の御所車風の三輪からなる石取車です。



熱田神社大祭 【秋祭り】



五斗山地区は、江戸時代中期に開発された新田で、熱田神社が勧請されています。祭礼の歴史や山車の由来は不明で、石取車風の山車に神楽太鼓が取り付けられていますので、神楽屋形の代用として取り入れられたと思われます。

祭礼日

10月第2日曜日

祭礼場所

五斗山熱田神社

内容・見どころ

神事後、地区名を金糸で刺繍した梵天と呼ばれる猩々旗を先頭に、山車の行列が神社を出発して、地区内を太鼓を打ち鳴らしながら半日ほどかけて練り歩きます。山車は祭車1輦で、前一輪、後ろ二輪の三輪からなる石取車風の山車ですが、石取太鼓ではなく下拍子の付いた神楽太鼓が取り付けられています。細く割った竹のばちで叩く太鼓の甲高い音が響き渡ります。



山車揃え



大正11年（1922）、八剣社の大祭に初めて山車が出され、笛と太鼓で練り歩き八剣社に参詣したといえます。また、大祭では「湯の花神事」が行われます。この湯の花神事は、平成28年（2016）に市の無形民俗文化財に指定され、使用される湯釜は享和2年（1802）に村人より奉納されたものです。

祭礼日

10月第2日曜日

祭礼場所

八剣社

内容・見どころ

山車まつりは湯の花神事後、午後から行われます。小島町、東町、本町、宮町、寺町、東新町の町内ごとに計6輦の山車が練り歩き、八剣社に参詣します。お囃子は桑名の石取祭にならった鉦と太鼓の大変にぎやかなもので、山車には飾り人形男女一対が搭載されています。また、湯の花神事は、拝殿前の地面に穴を掘ってクド（カマド）を作り、5つの湯釜で湯を沸かして神に供え、その湯を飲むことで無病息災、家内安全を祈る神事です。



あま市

てんのうまつり
天王祭

祭礼日 7月第4土曜日

祭礼場所 江上社

歴史

江上社は須佐之男命を祀っており、天王祭は江戸時代から行われてきました。往古の山車は解体され、戦後からは「仮」の山車で祭礼が行われてきました。しかし、平成12年（2000）に往古の山車の部材が倉庫の屋根裏から発見され、平成15年に伝統工法を採用して復元されました。

内容・見どころ

山車は旧津島街道を漆部神社から江上社まで練り歩きます。出発点である漆部神社では祭礼当日の午後に茅の輪くぐりの神事が行われ、夕方になると、提灯で明るく飾られた山車やふれ太鼓、木遣保存会等の行列が練り歩きます。また、江上社には提灯が飾られ、篝火が焚かれ、神楽太鼓が奉納されるなどの神事が行われます。山車は1輦で、「老宮司」というからくり人形が据えられ、白衣を着て、糸からくりにより、山車の通る道を清めながら進みます。



蟹江町

すなりまつり
須成祭
【百日祭り】

祭礼日 8月第1土曜日・翌日曜日

祭礼場所 富吉建速神社・八剣社

歴史

400年あまりの歴史があり、牛頭天王信仰のもと夏の疫病退散と五穀豊穡を願い行われてきました。須成祭はかつて「天王社」と言われた富吉建速神社の祭礼でしたが、現在は富吉建速神社・八剣社両社の祭礼となっています。平成24年（2012）に「須成祭の車楽船行事と神葭流し」として国の重要無形民俗文化財に指定され、平成28年には「山・鉦・屋台行事」の一つとしてユネスコ無形文化遺産に登録されました。山車人形も町指定有形民俗文化財です。

内容・見どころ

宵祭・朝祭を中心とした「車楽船行事」と、「神葭流し」に関わる数々の行事で構成されています。山車は車楽船（巻藁船）が1艘で、宵祭では提灯を付けた巻藁船が、朝祭では人形を乗せた車楽船がお囃子を奏でながら蟹江川を上ります。この際、祭船を通過させるために御葭橋が上がる光景は見どころの一つです。また、稚児が祭の主役となります。最初の行事から最後の行事まで100日間あることから、「百日祭り」とも呼ばれています。



名古屋の山車まつり

尾張の山車まつり

知多の山車まつり

西三河の山車まつり

東三河の山車まつり